ビクトル・マヌエル・コロ・ロドリゲス

活動:

日本語教師

書道愛好家

ビクトル・マヌエル・コロ・ロドリゲスさんへのインタビュー

ビクトル・マヌエル・コロ・ロドリゲスさんは、2021年12月、芸術大学（ISA）の日本研究講座で日本語を教え始めました。そこで趣味として始めた「書道（習字）」も教え、また日本文化を紹介するイベントにおいても、主催者からの要望に応じ、習字を披露しています。

一本の筆から日本へ

ハバナ国際図書展日本文化ブース（2013）

ビクトルさんは、2013年、キューバ最大の国際文化紹介イベントとも言われるハバナにおける「国際図書展」を訪れた際、そこの日本文化ブースで初めて日本の書道の筆を手にする機会に恵まれました。子供の頃から日本のアニメや映画が大好きでしたし、5歳の時には空手の道場に通っていた時期もありましたが、日本文化をあまり意識することはありませんでした。しかし、その一本の筆との出会いはビクトルさんを大きく変えていきます。「筆で文字を書くという行為はとても特別な物でした。筆筋で、漢字が意味すること以上のことを表現できる、それが魅力的で、すぐに書道が好きになりました」と振り返ります。この体験がきっかけとなり、ビクトルさんは日本語学習への意欲が沸き、芸術大学の日本研究講座で、15年近く日本語を教え、独自の教授法を確立した高浜ミキオ先生に連絡を取り、日本語の基礎を学び始めました。「高浜先生の授業はとても面白く、たくさんのことを学びました」というビクトルさんは、1年後には独学で勉強をするまでになりました。

当時のキューバは、まだ携帯電話のパケット通信でインターネットに接続できる環境ではありませんでした。ビクトルさんは、ノートを広げ鉛筆と辞書を手に、日本のアニメや映画を見ながら、わからない単語などを聞き取ってはノートに書き辞書を引くという作業を繰り返しました。日本の漫画や雑誌を読み、かつて一緒に日本語を学んだ友達と集まり復習しました。こうした独学は功を奏し、2019年、ビクトルさんは国際交流基金の「日本語成績優秀者訪日研修」の試験に合格し、大阪で２週間、日本文化と日本語の研修を受けることになりました。「日本にたどり着いたときは、夢を見ているようでした。」アニメや映画でしか知らなかった日本の現実、踏切が

大阪城訪問（2019）

京都の街を散策（2019）

広島の旅館にて (2019)

訪日研修終了書の授与、大阪 (2019)

開くときに鳴る音、信号機が青に変わり流れる音楽、歩行者と左折する自動車の信号機の両方が青なのに、あまりに自然に歩行者を優先する運転手たち。アニメなどを通じて知っているつもりだった日本の情景は「全て新しい経験でした」と当時を思い出しながら語ります。そして、「無人販売所でお客さんがちゃんとお金を支払い、支払額に相当する品物を取っていくという事実を目のあたりにし、ただただ信じられなかった」と日本の「安心・安全」を今でも覚えていると言います。日本社会の安全性、それを支える人々のメンタリティが、社会への「信頼」につながり、日本を他のアジア諸国、あるいは世界の他の国々と大きく異なる特性なのでは、と示唆しました。

生徒、独学、そして教師へ

関西国際センターにおける研修 (2019)

ISAにおける最初の日本語授業 (2021)

コロナパンデミックとその感染症対策で、外出制限が続いた期間に、ビクトルさんは当地で若手層を中心に愛用されているSNS「テレグラム」を利用し、日本語についてのクイズなどを発信すると同時に、日本の一般的な習慣や伝統について意見交換をするチャンネルを立ち上げました。ハバナで対面授業を受けられる人たちだけでなく、日本語に関心のあるキューバ全国の人たちに、日本語教育の補完的かつ魅力的な選択肢として利用してもらいたい、というのがビクトルさんの考えでした。「日本語を習得し、いずれは日本語の先生になろうという気持ちがはっきりし、自分自身を研鑽し、日本語の勉強を始めたいと考える人たちを助けたいという気持ちが芽生えたのは、日本での研修がきっかけだったように思います。」と言います。自分の実力を見てみようと始めたテレグラムのチャンネルには、キューバ全国からフォロワーが集まっています。

一方、ビクトルさんが日本語教育の母校として親しみを持つ芸術大学の日本研究講座では、新型コロナウイルス感染症流行の影響で日本語教師が当地を離れ、日本語教育は存続の危機に瀕していました。この危機に対してビクトルさんは、自分が日本語教師として教えるには、資格はもとより、経験も能力も不十分であると自覚しながらも、芸術大学で高浜先生から学んだ日本語と日本語の教え方、その革新的な教授法を思い返し、大胆にも教師としての協力を申し出ました。その決断については、「とても怖かった。ほぼ独学で日本語を学んだ自分の経験が十分でないことを分かっていたので、不安でした。実際、最初の授業は散々でした。しかし、後悔はありません。むしろ自分を受け入れてくれた芸術大学に感謝しています。」と語ります。日本語に興味を持つ若い人がたくさんいると知っていたので「誰かが彼らにチャンスを与えなければならないと思いました。たとえ恥ずかしい思いをしても、彼らの道を開けることの方が大事だったのです。」芸術大学で日本語教師を始めてからこれまでに、約120人の生徒を受け持ったということです。

日本語教師としての資格がないと、生徒に非難されるような経験はありませんでしたかと尋ねると、ビクトルさんは生徒に実際に日本に行った経験を引用しながら授業をしているからか、と前置きをしながら「幸いなことに、そのような学生には

*ビクトルさんのテレグラムチャンネル: t.me/koro_sensei_kurasu

「僕は生徒から学んでいるのです。彼らから意識的に、率先して学ぶよう心がけています。そして自分の間違いから学ぶことで、よりよい教師に近づきたいと思うのです」

国際日系デーの式典における書道と日本舞踊の披露（2022）

出会っていません。ただ、答えられない質問に対しては、確認します、と答えるようにしています。そうして、教えながら、自分も新しいことを一緒に学んでいます。不十分な対応にイライラされるかもしれないことは理解しています。でもそれも学生に好奇心があるからこそだと思います。こうした経験が、自分と、そして学生の行く道をより良いものにしていくのだと思います。今のところ、日本語を教えるのはとても楽しいです」と笑顔を見せます。このように話すビクトルさんを前に、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺が頭をよぎります。「僕は生徒から学んでいるのです。彼らから意識的に、率先して学ぶよう心がけています。そして自分の間違いから学ぶことで、よりよい教師に近づきたいと思うのです。」と続けました。

ビクトルさんによる日本語教育

ISAの日本研究講座における習字のワークショップ（2022）

ビクトルさんは筆で字を書くことが好きになり、ハバナ国際図書展の日本文化ブースで、今度は自身が習字を披露するようになりました。「ブースを訪れる人が、日本文化を感じられるものを持って帰れるように」と、何千もの人の名前を書き続けました。2020年、キューバを訪れた書道家の浜野龍峰氏と出会い、その作品を実際に目にしたことは、ビクトルさんに、日本語と同様に独学の習字に過ぎないものの、芸術大学で「書道」のワークショップを始めるきっかけを与えました。文字を美しく見せる基本が筆筋にあると知っているビクトルさんは、漢字を教える際は、書き順はもとより、「とめ・はね・はらい」といった書き終わりも丁寧に教えるよう心がけていると言います。日本語学習の一環で習字（書写）を組み込むことは、日本の学校でも実践される学習方法であり、ビクトルさんが日本語教育に独自に取り入れている点には驚かされます。

「日本語の授業で次はこんなことをしてみよう、あれもやってみようと準備をするのは、大変ですが楽しいです」と教えてくれました。独学故に誰からも認められる正式な日本語教師としての資格は今もありませんが、日本語を教える経験を積み、謙虚に学ぶ姿勢は、周りを惹きつけていると言えるでしょう。習字の腕前は、今では他の日本文化の愛好グループから活動を手伝って欲しいと引っ張りだこになるほどです。その腕前を磨くうえでも「浜野龍峰氏や永田充氏（バルセロナ在住の書道家）のような巨匠に習いたいですね。」と抱負を述べました。

新たなスタート

ビクトルさんはもうすぐ30歳。2022年11月、ハバナで、限られた招待客でとてもシンプルな結婚式を挙げました。新郎のビクトルさんは少々長い髪を後ろで束ね、足首まである深いブルーの袴に下駄を履いています。新婦さんは、体のライン全体を隠す服で、ウエストに幅広い帯を巻き、同じく下駄を履いています。そう、日本の着物を着ての挙式です。「妻も日本文化が好きで、「せっかくだから着物を着たい」と言ったのです。友人に相談したところ、日本人の友達が着物を貸してくれました。」と笑いながら写真を見せてくれました。着物の紐の結び目のように、結束と調和に満ちた二人には、日本的な空気が漂っています。新たなスタートを切ったビクトルさんの将来が楽しみです。

在キューバ日本国大使館
広報文化班